

# 生活世界と実践論的転回

## —ハイデガーと社会的実践理論 (1)

福 士 正 博

### I 問題関心

私たちは今、社会科学が経験している「実践論的（再）転回」(practice (re) turn) の動きにどれだけ自覚的であるだろうか。

本稿の目的は、ハイデガー実践哲学を経由することで、社会的実践理論 (Social Practice Theory) を、生活世界 (Lebenswelt, Life World) 論として再構成することにある。生活世界はこれまで、晩年のエドモント・フッサールやアルフレッド・シュッツによって、現象学の視座から取り上げられてきた課題である。社会的実践理論の視座から生活世界を取り上げるということには、これまで行われてきた現象学的生活世界論に対する批判が含意されている。ハイデガー実践哲学に傍点を付しているのは、ハイデガーの基礎的存在論を、行為や実践という視角から読み込み、その可能性を追究することで、生きいきとした生活世界の像を描くことができるのではないかと考えているからである。生活世界を、表立った形で、現存在の平均的的日常性としてはじめて問題化したのはハイデガーである。生活が身近であるだけに、逆に遠い存在としてしか意識されないという逆説が、生活世界を直接的に描くことを難しくさせている。生活世界を事物的存在だけを対象とするような認識論として構成するならば、そのようになることは避けられなくなってしまう。平均的的日常性は、認識論としてではなく、存在論として描くことではじめてその姿が顕在化する。だがその一方ハイデガーは、この平均的的日常性を実存の非本来的姿としても描いている。生活世界は、本来性と非本来性の両義性を持つ実存をそのままの姿でリアルに描き出し、本来的な日常生活の可能態として明らかにするものでなければならない。

しかし、ハイデガー哲学を実践哲学と位置づけることに躊躇する人は多いはずである。とくに、『存在と時間』において、ハイデガー自身、行為という言葉すら使うことに躊躇していたことを考えるならば、ハイデガー哲学を実践哲学として構成しようとすることに疑念を抱くことは当然といえるのかもしれない。だが、ハイデガー哲学を経由して社会的実践理論の視座から生活世界を再構成しようとする本稿の目的からすれば、ハイデガー哲学の中に実践の諸要素を検出し、それを実践理論として体系化する営為は、必ず通過しなければならない道となる。試みられているのは実践理論の体系化であり、ハイデガー哲学を実践哲学とし

て体系化することではない。後に検討するように、ハイデガー哲学とプラグマティズムとの異同に注視する場合でも、ハイデガー哲学の中にある実践の諸要素を検出するかぎりではプラグマティズムの位置を確認することにとどめるべきであり、常に両者の出自の違いに注意が払われていなければならない。

生活世界とは、人々が日々営んでいる具体的で、実践的な日常的領域を指している。したがって、生活世界論は、生活世界の生の姿を、人々が日常的に行っている具体的な行為として描き出すものでなければならない。そのためには、その像から、少なくとも二つの論点が明らかにならなければならない。第1に、我々はどのような世界に生きているのか、我々が生きている世界とはそもそもどのような世界なのかが明らかになっていること、第2に、我々はその世界でどのような生き方をしているのか、すなわち、我々はそのような存在なのかが明らかになっていることである。ハイデガー哲学のように現存在を世界に内属した存在として描くのであれば、生活主体は、生活世界の中で様々な関係を取り結びながら生きている存在ということになる。自己との関係、他者との関係、モノとの関係など、生活主体は、様々な関係を日常生活の中で取り結び、その関係性を基礎に生活を営みながら、世界に開示することで、独特の空間を形成している。問題は、リアリティのある生活世界を描くための方法とは何かという点にある。

先に述べたように、生活世界はこれまで、フッサールやシュッツなど、現象学を起点に、その視座から分析されてきた。しかし、サンドバーグやダルアルバが指摘したように、「それを発展させたのは、ハイデガー、サルトル、メルロ＝ポンティ、ガダマー、シュッツといった何人かの別の現象学者であった。これらの思想家それぞれが特定の知識関心を追求していたが、そこには生活世界の概念化にとって共通項ばかりでなく、違いと対立も存在している」(Sandberg and DallAlba, 2009)。本稿は、既存の生活世界概念を、社会的実践理論の視座から読み直し、そのことで生まれる可能性や意義を探ることを目的としている。「ハイデガーと社会的実践理論」という副題は、フッサールやシュッツの生活世界概念を批判的に継承したハイデガーの議論を経由しつつ、社会的実践理論による検討を着地点とするという意味が含意されている。このことから本稿では、生活世界概念を掘り下げるために、フッサール、メルロ＝ポンティ、ハイデガー、社会的実践理論の順序で議論を進めていくことにする。本稿で社会的実践理論として主に取り上げている論者は、社会的実践理論第2世代に属する代表的研究者セオドル・シャツキとアンドリース・レクヴィッツである。この二人を取り上げるといことは、社会的実践理論第1世代にあたるギデンズやブルデューの研究成果の上に築かれた近年の動きとその成果を積極的に評価しつつ、現象学に縛られていた生活世界論から離れる可能性を追究するという意味が込められている。第2世代の実践理論は、実践理論自体だけでなく、すでに消費、組織研究、教育学、看護学など多方面の領域に影響を及ぼしている。このことは、生活世界論にもあてはまる。

シャツキは、ハイデガーとウイトゲンシュタインの両者に共通しているのは、生活のあり様を哲学的に掘り下げようとする「生活-哲学」(Life-Philosophy)と呼ばれる領域への関心であると述べている。この動きは、1870年代に、デイルタイやニーチェとともに始まり、ジンメル、スペングラー、シュプラランガーなどの思想家を巻き込みながら、1920年代にハイデガーによって、そして1940年代にウイトゲンシュタインによって決定的な前進を見た哲学的関心である。最初の生活-哲学者とされるデイルタイに従うならば、生活こそがすべての絶対的始まりである。ハイデガーも、ウイトゲンシュタインも、生活が常に変化し、発展していくのは、そこに人間行為が不断に流れているからだ、という点で共通している。

シャツキは、彼らの哲学が生活世界論と触れ合う部分について次のように述べている。

「生活-哲学者からすると、人間の生活とは本質的に活動である。対象でも、物質でもなく、それは間断なく行われる過程であり、想定されている構造や形態がどのようなものであっても、それに先立つものであると同時に、常にそれを上回り、自己増殖し、発展していく動きが生活である」(Schatzki, 1993)。

この指摘にあるように、生活とは、決まりきった形式が繰り返されるだけの日常というものではなく、常に変化し、増殖し、発展していく営みである。それを本質的に規定しているのが、人々が間断なく行う行動である。ハイデガーとウイトゲンシュタインが重なるのは、こうした生活世界を根底から規定する行動(行為)に対する関心にある。社会的実践理論を生活世界論として構成するという本稿の目的は、言い換えれば、この指摘にあるように、生活世界の哲学的基礎を実践の視座から明らかにするという事にほかならない。

生活世界とは、我々がリアリティをもって生きている日常的世界そのものである。それだけに、その営みがどのように行われ、どのような可能性を秘めているのか、そしてその逆に日常性を台無しにしてしまう要因が生活世界にどのような形で忍び寄ってきているのかを明らかにすることは、社会科学にとって大事な課題となる。生活世界とは、日常の実践を束ねることで構成されるライフスタイル(ストーリー)そのものである。したがってそのスタイルの中に、その人の生き方そのものが直接的に反映されている。一つひとつの実践はとるに足りないささやかなことがらであっても、それを束ねることで形成され、浮かび上がってくるライフスタイルに、その人の独特の生き方が紡がれている。生活世界をどのような視座から取り上げるのかという方法論は、生活世界の描き方を左右するだけに、慎重な配慮を必要とする。本稿の方法論的視座は社会的実践理論にある。社会的実践理論の視座から生活世界を取り上げる主な理由は次の二つである。

第1に、これまでの研究上において中心的位置を占めていたエドモント・フッサールやアルフレッド・シュッツの生活世界概念では、諸個人の(純粹)主観に沈潜した独我的な現象学的考察が行われているために、人々が日常生活を通して世界とどのように向かい合っているのかという、最も肝心の視点が薄くなってしまっている(欠落している)ことである。現

現象学者は、しばしば、「現象学は日常性という概念を重視している」という言い方をする。しかし、このような言い方にもかかわらず、「事象そのものへ」をうたう現象学から生活世界の日常的なリアルな姿が浮かび上がってこないのはなぜなのだろうか。むしろ、現象学的還元という現象学の本質的方法論そのものが生活世界のリアルな姿を浮かび上がらせることを邪魔しているのではないか。日常生活の中で次第しだいに形成されてくる自然的態度を判断中止（エポケー）したからといって、その後に残る現象学的残余がリアリティを持った生活世界であるという保証はどこにもない。現象学の立場からすれば、現象学の本質は、意識に内在することで、真理に近づく絶対的な確信条件を引き出そうとすることにある、したがって現象学の視座から生活世界論の核心を引き出そうとする場合でも、生活世界論はこの確信条件を発見することを課題としていることになる。しかしこの指摘だけでは、先の疑問に的確に答えたということにはならない。晩年のフッサール、現象学的社会学を打ち立てたシュッツ、主観性の世界を間主観性にまで広げ、そこで確立された生活世界が植民地化されている現実を訴えたハーマスなどすべての議論が、その基礎を共通して現象学に置いている。現象学がこの問いに十分に答えられないのであれば、我々が日々営んでいる生活世界を現象学に代わる新しい視座から検討してみることが必要になる。社会的実践理論の視座から生活世界を考察するという関心は、こうした疑問や問いに答えようということにある。

第2に、こうした現象学が持つ欠点を解消するには、生活主体の存在論的分析や、意識哲学を身体論や知覚論で埋めながら、その成果を社会的実践理論が受けとめることで、ライフスタイルそのものをリアルに描出する必要があるからである。「ハイデガーと社会的実践理論」という副題には、一足跳びに現象学から社会的実践理論へ辿り着くことができない事情が反映されている。この事情を埋めつつ、社会的実践理論に辿り着くためには、両者の間にある中間項を正確につかまえ、それを的確に社会的実践理論につなげていく必要がある。後述するように、社会的実践理論は文化理論の一翼をしめつつ、その一方で文化理論からはみ出す要素も胚胎させている。そのことは、ハイデガーの解釈学的現象学や後期ウィトゲンシュタインが行う現象学的生活世界概念批判を受けとめつつ、それを更に独自の生活世界論として昇華していく要素が社会的実践理論に内在しているということの意味している。このようにハイデガーを経由して社会的実践理論につなげるという段階を踏んだ分析は、生活世界を社会的実践理論によって直接分析するより、現象学が持つある種の欠陥を拭い去るという予備的考察を経由することのほうが、実質的で有効な方法となりえるのではないかと考えているからである。

## II 社会的実践理論と生活世界

それでは、社会的実践理論と生活世界はどこで交差するのだろうか。

生活世界とは、何の価値や規範も有することなく、中立的なモノとか対象がたんに集積されただけの場というようなものではなく、すでに企図された可能性領域として、そしてまた現存在自身が直接的に関与する全体として開示されている生きた空間である。問題は、生活主体である現存在が可能態としての空間をどのように生活世界として開示するのかである。その答は現存在が行う社会的実践にある。

第1に、起床する、歯を磨く、食事をとる、車で通勤する、掃除をするなど、我々が日々行っている日常的な習慣的行為によって生活世界が形成されていることである。社会的実践理論は、これらを行為としてではなく、実践として読み込んでいる。フッサールやシュツの現象学が、生活世界を、意識に内在したものとして構成しているのと比較するならば、この構成は、意識（精神）と実践（身体）が対極であるという意味で対照的である。シャツキは、『社会的なるものの場』（2002年）において、この点について、社会的実践と「場」の理論との関係という視点から、次のような指摘を行っている。

「場の存在論はほとんどハイデガーの『存在と時間』の影響を受けている。それらは、ある種の開示或いは浸透媒介物というひとつの空間を、社会的なるものの性格、或いは構成の中心に位置づけている。存在論が空間に依拠していることは、存在論の場が多様である理由を明らかにしている。開示或いは媒介物という資格を持つ空間は、ものごとが起こり、実体が存在する場であり、そしてその一部という資格を持つことになる。殆どの場の実在論者は同時に実践理論家であることに注意しておかなければならない。このように場と実践が収斂することは、ハイデガーを起点とした存在論や、それに加えて、ウイトゲンシュタインの影響が反映したものである。言うまでもなく、空間概念の中に分節化された埋め込まれた局所性は、こうしたハイデガーの思想に特有のものではない。ヘーゲルの伝統は常に、個人的なるものを社会全体に挿入するという本質を強調してきた。存在論的社会主義は一般に、諸個人を、社会現象の中に文脈化されているものと見なしている。新しいのは、存在と知性の空間に関するハイデガーの直観にある」（傍点引用者、Schatzki, 2002）。

シャツキの指摘は、生活世界と社会的実践理論との関係を明らかにしようとする本稿の主題にとって、とりわけ大事な論点が提示されている。ここで取り上げる実践とは、先に挙げたように、我々が、ふだんから疑問に思うこともなく、毎日、自明なこととして、日常的に繰り返し行っている一つひとつの行為を指している。人々が行う主体的行為は、主体が客体に、ある目的をもって、意識的に働きかける行動である、と考えられてきた。そこでは、主体-客体、理論-実践という、デカルト的な意識哲学の心身二元論が前提となっている。それに対して社会的実践、とくにハイデガー哲学に基礎づけられた社会的実践には、この二元論を克服し、世界=内=存在という現存在の実存から出発した存在了解や解釈、そして意味を前提とした指示連関がある。実践とは、意識的に行われる行動というより、非明示的で非主題的な振る舞い（comportment）である。これらの実践が集まり、その束によって作られ



る空間を生活世界と呼ぶならば、この空間がどのような哲学的基礎に基づいているものなのかが明らかされなければならない。シャツキがここで『存在と時間』を引用しているのは、ハイデガー哲学こそ、この問いに対する回答の糸口が提示されているという確信があるからである。「ハイデガーと社会的実践理論」という副題がつけられているのは、実践と生活世界に関するシャツキと同じ問題関心を活かそうとしているからである。

この引用文で最も大事なものは、場と実践が収斂すると指摘されている傍点部分にある。この指摘にあるように、シャツキの社会的実践理論は、ハイデガーの場の存在論＝空間概念に依拠して立論されている。場と実践が収斂するという論点は、社会的実践理論の中核を形成していると言ってもよい。ここで言う場とか空間は、世界＝内＝存在としての現存在が、内存在として世界に「棲みつく」ことで、道具的存在に配慮的気遣いを行いながら、日常生活を實踐している場所としての生活世界を指している。この世界において最も身近に出会うのは道具である。生きるという目的を実現する手段が道具なのであれば、その道具とどのように出会い、それをどのように使いこなすかは、生活を構成する上で最も大事なことがらとなる。言うまでもなく、ここで言う道具は世界に被投された現存在が位置づけられた存在として適所的に出会うものであって、企投的存在である現存在の目的の指示連関にはめ込まれた存在である。ここで重要なことは、道具の目的連関が行為の目的連関によって支えられていることである。生活世界が社会的実践理論と結びつくのはここにある。

生活世界において行われる実践が、起床する、歯を磨く、食事をとる、車で通勤する、掃除をするなど、我々が日常的に繰り返し行っている行為を指しているのであれば、現存在が道具的存在との交渉の中で行っている行為空間と生活世界がどのように接続しているのが最も重要な論点となる。あえてこうした問いを行うのは、社会的実践理論が、顕示的で華やかな行為より、日常的に自明ともいえる習慣的で、非顕示的な行為に主な分析対象を置き、生活空間＝生活世界の実態解剖に関心を寄せようとしているからである。これら一つひとつの行為を実践と考える社会的実践理論の、一方における分節化や解釈を実践が担うという了解可能性と、他方の、あまり意識することなく、繰り返し行われる日常的行為との接続点を、ハイデガー哲学はどのように見ていたのだろうか。

第2に、社会的実践理論と生活世界の交差は、デカルトからカントへ受け継がれてきた近代哲学の認識論の批判の上に成立していることである。シャツキは、『マルティン・ハイデガー 空間の理論家』(2017年)の中で次のような指摘を行っている。生活世界と社会的実践理論がどこで交差するのかという関心を明らかにする上で、ここで述べられている指摘はかなり重要である。

「ハイデガーは、道具(電話、車輪、或いはハイデガーが好んで使っているハンマーなど)を用いることに忙しい人々の内存在の実践の様式が、人々が知識を獲得する(そしてそれらを理論化することができる)という内存在の認知様式より優位にあるということを論じてき

た。彼の指摘にあるように、知るということ (Erkennen) は、ある目的のために、具体的プロジェクトを実施しつつ、ものごとを使用する中で構成されている具体的な内存在様式に根拠づけられている。振舞い (comportment) の実践の様式は、二つの点で認知様式に対して優位にある。(1) このことは、人々が通常、おのずから内存在であるという様式にあるということの意味しており、内存在の「欠損」様式が実践的関りを持つようになるということ、(2) 人々は道具を使うことができなければ、ものごとを認知することはできないこと、である。『存在と時間』において、ハイデガーは、虚脱 (breakdown) が実践的関りの中で起こり、彼女がことがらを見て、精査しなければならない時にのみ、人は知識を獲得するようになるということ論じていた。しかし彼は、この主張を即座に放棄したように見える。実践的なものの優位というこの命題は、20世紀の思想にとって相当重要で、それが惹起する課題は今日かなりの議論の中心として残っている。この命題は、革命に近いものである、何故なら、主体-客体の分化を前提とした現代哲学はエピステモロジー (知の理論) を中心的哲学的営為としていたからである。指摘されたように、人々が世界やお互いを知るのかどうか、どのようにそれを行うのかという問題は、デカルトからハイデガーの指導者であったリッケルトやフッサールに至るまで、最も大事な問題であった。知識が内存在様式の基礎様式であるという主張は、知識それ自体から、知識が存在し、獲得される背景にある活動の実践的形態へと哲学的関心を転換させている。このような議論を行う中で、ハイデガーは、実践活動の名前で認識論の中心性に挑戦していたウイトゲンシュタインやアメリカのプラグマティストであるジョン・デューイのような現代人との仲間入りをするようになった」(傍点引用者, Schatzki, 2017)。

ここでも、引用文の傍点部分が決定的に重要である。知識は、それ自体からというより、その背景にある活動の実践的形態によって獲得される。知識は主体である人間が客体を理解することによって獲得されるというものではない。表面的にはそうであるとしても、知識の獲得は、世界=内=存在である人間 (現存在) が、内存在である自己を表出するために日常的に行っている実践を通じて、そこに根拠づけられながら獲得される自己了解である。知識の獲得がハイデガー哲学の言う了解に置き換えられているということに注意しておかなければならない。この点からすると、一定の理論知をもって実践が行われるのではなく、逆に、実践を経由してしか、知識 (自己了解) に至らないことになる。知識と実践との関係は、伝統的哲学が追求してきたものとは本質的に逆の関係にある。シャツキが上の指摘を行ったのは、ハイデガー哲学が言う解釈学的循環の一面を切り取っているからにほかならない。実践は、了解の先行構造 (予構造) を前提に、現存在の目的と世界の世界性 (有意義性) を、「すでにわかったもの」として受け止めることで行われている。実践が、非主観的、非反省的、非明示的になるのは、実践が行われる前に、このような了解が先行して行われ、実践の目的や対象をあえて主題化する必要がないからである。日常生活が習慣的に行われる行為に

疑問を持つことなく反復的に行われているのは、単調な生活に対する反省がないからではなく、その生活を合理的と受けとめる了解が「すでに、いつも」あるからである。生活に対する反省が生活の中から生まれてくるのは、被投と抱き合わせて企投という新たな可能性を追求する動きが現存在の中に芽生えているということである。現存在が世界=内=存在としてその世界に被投されているということは、現存在がその中でしかおのれの可能性を追求できない実存的範疇であるからである。ハイデガーが指摘するように、「現存在はおのれ自身に委付された可能的存在であって、底の底まで被投的な可能性である」。生活世界は、このように被投的存在である実存的な現存在が営む空間である。生活世界は、認識論としてではなく、実践論として解剖しなければならない理由がここにある。

了解には、自己了解と世界了解の二つの方向性がある。実践は、この二つの了解を結びつける契機である。更に言えば、自己了解と世界了解は実践了解によって結びつかなければ、現存在の実存を開示したことにはならない。生活世界が了解の開示態なのであれば、自己了解と世界了解がしっかり結び合わなければ、生活世界も安定しないことになる。問題は、実践了解がどのようにして行われているかにかかっている。実践的了解とは、ある目的を達成するという全体的な目的連関の中で、x（例えばハンマー）を正しく使うことで、y（板に釘を打つ）を行う仕方を了解しているということである（understanding-how）。このことは、その道具についての実践的な了解があるかぎり、道具を用いた活動の中に目的としてのおのれの実存的了解があらわれるということである。すなわち、実践的了解と自己了解は連動している。環境世界に内属して生きる現存在は、生きる目的を達成するために、手許にある道具的存在を有効に使うって行動しなければならない。道具の使い方を熟知し、それを、例えば釘を打つという行動として具体的にあらわにすることが自己了解にほかならない。オクレントが述べているように、本質的に、「実践的了解から離れた自己了解というものはない」（Okrent, 1988）のである。世界に被投された現存在がおのれを了解し、世界にあらわにするには、実践を経由するほかはない。実践は自己了解の開示態である。ある目的を達成するために正しく道具を使うという自己了解は、その道具が世界の中で適所的位置と役割を与えられていることについての世界了解を前提としている。「一定の道具の実践的了解とそれらが定位されている目的の自己了解は、ハイデガーの「世界=内=存在」の二つの側面、すなわち「有意義性」の了解と「～のため」という了解を構成している」のである。

このように、ハイデガー哲学にとって、道具の実践的了解、目的を実現する仕方の実践的了解、そして実現されるべき目的という三つは相互につながっている。しかし注意すべきは、これらのつながりが論理的つながりではあっても、実際につながりは偶有的でしかないことである。これら結びつけているものが実践であるかぎり、現存在が行う実践態様によって、結びつきにほころびが生じたり、不安定になったり、場合によっては崩壊してしまうかもしれない。偶有性は、世界=内=存在にとって内在的である。生活世界論に求められているの



は、生活世界のこうした変動させる動きである。実践の変化が生活の様態を変化させている。フッサールのように意識に沈潜した理念的な生活世界の像を描くことだけに腐心するならば、確かに科学的世界の陰に隠れた生活世界を浮かび上がらせることはできたとしても、生活世界が本来的に持つ、泥臭く、活力のある姿を浮かび上がらせることはできなくなる。ハイデガーが言う企投は、私たちが可能的存在であることを意味しているとしても、私たちが常に可能性を持っているということを保証するものではない。可能性を現実化するのとは実践のあり方にかかっている。

### Ⅲ 文化理論と社会的実践理論

#### (1) 実践論的転回

実践に対する関心が高まってきたのは、1960年代から70年代にかけてである。所謂実践論的転回 (practice turn) の「ターン (転回)」には、二つの意味がある。ひとつは、既存の実践理論を更に転回し、実践理論を更新していくという意味、すなわち、プラトンやアリストテレスなどギリシャ哲学を淵源として、中世スコラ哲学を経由し、ヘーゲル、そしてマルクスに至るまで連綿と続いてきた実践 (プラクティス) に対する関心を再興させたという意味、もうひとつは、既存の実践理論を参照しつつも、それと一線を画しながら、新しい実践理論を作り上げていくという意味である。言語論的転回 (linguistic turn) や解釈学的転回 (interpretative turn) を背景に、文化理論の一環として組み入れられるようになった実践理論が、ブルデュー、ギデンズといった第1世代から、アンドリース・レクヴィッツ、セオドル・シャツキ、チャールズ・テイラー、ラクラウ＝ムフ、後期フーコー、ガーフィンケルなどの第2世代に継承され、再帰的近代という時代状況に合った実践に対する関心が生まれてきたという意味である。この二つに共通しているのは、実践論的転回から実践論的再転回へと、社会的実践理論研究のステージが一段高くなっていることである。社会的実践理論の紹介すら行われていない我が国の研究状況からすれば、プラクティスターンではなく、プラクティスリターンの段階に到達している欧米の研究は、それだけ先へ進んでいると見なされなければならない。

本稿が対象とするのは、後者の再転回についてである。その場合にとくに必要なのは、社会的実践理論が文化理論の一翼として新たに登場してきた理由やその意義をしっかりとつかむこと、そしてそのことを前提に、更に転回しなければならなかった理由を明示的に説明することである。とくに後者の場合、レクヴィッツやシャツキの社会的実践理論の底流に流れているのが、ハイデガーの『存在と時間』に代表される解釈論的現象学と、後期ウイトゲンシュタインの『哲学の探究』に見られる言語学であったことからすれば、社会的実践理論がどのような哲学を基礎に構築されているのか、そしてそれを基礎にあらためて転回しなければ

ならなかった新しい理論的背景とは何かを説明されなければならないことになる。

リチャード・バーンスタインの『実践と行為 人間活動の現代哲学』(1971年)によれば、実践に対する哲学的アプローチには4つの類型がある。ひとつは、観念論と唯物論という二元論を克服する解決策として、実践に注目するようになったヘーゲルの伝統や『フォイエルバッハ論』などに見られるマルクス主義、二つ目は、チャールズ・パースやジョン・デューイに代表されるアメリカプラグマティズムによる実践理論、第3に、実存主義や分析哲学に見られる実践概念、そして最後に、それらに基づいて展開されたサルトルやチャールズ・テイラーの実践観である。第1の類型が先に挙げたひとつめの「転回(ターン)」を指すのに対して、第3、第4の類型が二つめのそれに該当する。アメリカのプラグマティズムの動きは、社会的実践理論と相当重なる部分があり、とくにハイデガー哲学との異同については慎重な吟味を必要とする。レイジョ・ミエッティネンも、実践に対する関心が高まってきた背景を取り上げるにあたって、「実践への再転回」と題して、「転回」ではなく、「再転回」という表現を用いている。このような表現をあえて使うのは、「これらの実践理論や実践観にあらためて関心が寄せられているということの他に、実践理論が文化的-歴史的活動理論、社会文化的アプローチ、プラグマティズム的な行為理論など一段と進化する形で発展しているからである。再転回とはこうした最近の研究状況に注目するという意味が含まれている」(Bernstein, 1971)。

こうした近年の実践に対する関心が、実践論的転回(プラクティスターン)と呼ばれる新しい文化状況の流れを作っている。第2次大戦後欧米諸国で起こった文化論的転回(カルチュラルターン)を受け、とくに先進諸国では、文化が社会の秩序を形成する基軸として重要な役割を果たしてきた。文化の役割に対する認識の高まりとともに、言語論的転回、解釈学的転回、パフォーマンスターン、ポストコロニアルターン、翻訳論的転回など様々な転回が行われてきたのも、文化が持つ多様な意味を、それぞれの分野で掘り下げる営為が活発に行われた証と見ることができる。社会的実践理論が文化理論の一翼を占めるようになった1980年代以後の、実践理論の進化が持つ哲学的意味、より限定していえば、ブルデューのハビトゥス論やギデンズの構造化理論を批判的に継承した第2世代の実践理論が持つ哲学的意味を探ることは、社会的実践理論と生活世界との関係を明らかにする上でも大事な通過点となる。

ここで言う哲学的意味とは、あらためてミエッティネンらの言葉を借りるならば、「レクビッツやシャツキの社会的実践理論の底流に流れているのが、前期ハイデガーの『存在と時間』に代表される解釈学的現象学と、後期ウィトゲンシュタインの『哲学の探究』に見られる言語学であったことからすれば、社会的実践理論がどのような哲学を基礎に構築されているのか、そしてそれを基礎にあらためて転回しなければならなかった新しい理論的背景とは何かを説明しなければならない」という指摘にあるように(Miettinen, Reijo, 2010)、前期ハ

イデガーに見られる実存主義的实践哲学と、後期ウイトゲンシュタインに見られる言語哲学の果たした役割を指している。このように、実践論的転回はたんに実践に対する関心が増大したからというだけでなく、哲学的な裏づけに支えられ、確固とした思想的基盤を持っている。勿論、このように言い切るためには、何故ハイデガーやウイトゲンシュタインなのか、そして彼らへの注目がこの時期に行われた理由は何か、という二つの問いに対する答が用意されていなければならない。

すでに述べたように、実践と行為 (action) は同義ではない。また、実践は人間活動 (human activity) と異なる概念である。実践理論は主意主義的行為理論の枠組を延長することで登場した理論でもない。このように言うことができるのは、実践を人間の主体的行為 (human agency) に吸収することのできない、拡張された意味がそこに含まれているからである。実践を文化との対抗で考察しなければならない哲学的意味がここにある。

わが国はもちろん、欧米においても、文化理論といえば、文化の自律性や文化の持つ決定力という視点から文化論的転回の意義を探ろうとする傾向が強い。この転回から派生したカルチュラルスタディーズの研究もすでに多くの領域にまたがって相当の蓄積が生み出されている。しかし、文化論的転回が持つ限界が実践論的転回を誘発したという逆のベクトルもあることを考えるならば、両者の必然性的つながりに対する問題意識がそもそもなければ、文化論的転回の持つ意義も確定することもできず、議論が中途半端で終わってしまうことになる。実践理論が文化理論の一翼を占めているとはいえ、その一方で、文化理論からはみ出し、文化理論を凌駕する要因が実践理論の中に胚胎しているという点にまで関心が及ぶことがなくなってしまうからである。吉見が指摘するように、文化論的転回はたんに既存の社会理論ではとらえきれなくなった社会現象を文化という切り口で解釈する文化の自律性を表わす言葉にとどまるものではない。そこにはとくに第2次大戦後の世界の地殻変動の中で、「記号的に構成され、解釈され、さまざまな不平等、差別と排除を伴って政治的に構築されている」不安定で、流動的な文化概念に対する眼差しも含まれている。文化理論はその意味で、既存の社会理論に対する批判から登場してきたという革新的な意味を持つと同時に、資本主義の機制に取り込まれ、「資本主義の経済領域そのものが、情報やコミュニケーション、文化的なコードによって組織される様相を呈してきている」という両義性を持っている。この両義性を理由に、「文化はけっして何らかの一貫した原理で構成される統一体ではない」と言うこともできるかもしれない。文化概念にこのような両義性があることを踏まえ、吉見が選んだのは、「人々が日常のなかで何気なく営んでいる文化的諸実践についての政治学的かつエスノグラフィックな知の可能性に関心を向ける」ことであった (吉見, 2003)。しかし、文化論的転回が言語論的転回や解釈学的転回を受けた知の地殻変動であるのならば、そもそも答えなければならなかったのは、文化的実践による意味解釈の妥当性根拠であったはずである。文化概念が時代の変化の中で動揺し始めている時、カルチュラルスタディーズが持つ

## 生活世界と実践論的転回—ハイデガーと社会的実践理論 (1)

批判的精神を各研究領域から掬い上げる営為を繰り返すだけでは、実りある成果が得られるとはとても思えない。大事なことは、文化理論にあって、文化理論にとどまりながら、なおかつ文化理論から脱け出す可能性を見出すという、一見すると背反した原理を発見することである。社会的実践理論にはそうした可能性が秘められている。

### (2) 生活世界と社会的実践理論

それでは、生活世界を社会的実践理論から検討してみる必要はどこにあるのだろうか。そもそも、生活世界論に果たす社会的実践理論の役割とはどのようなものなのだろうか。社会的実践理論第2世代の代表的人物の一人セオドール・シャツキは、『現代理論における実践論的転回』(1996年)の中で、この点について次のように述べている。

「社会理論において、実践アプローチは独特の社会的存在論として広がりを見せている。社会的なるものは、共有された実践的理解をめぐって中心的に組織された、身体化され、物質的に織りなした実践の領域を指している。この概念は、社会的なるものを定義する際に、個人、(相互)行為、言語、象徴システム、生活世界、制度／役割、構造或いはシステムに特権を与えている説明と比較すると対照的である。これらの現象は、実践理論が言うには、実践分野を経由して分析することができるだけである。例えば行為は実践の中に埋め込まれているものであり、諸個人はまさにそれらの中で構成されている。更に言語は一種の行動であって、したがって実践現象なのであり、それに対して制度や構造はそれらの結果である」(Schatzki, 1996)。

ここでシャツキが述べている論点は二つある、第1に、これまで社会理論が取り上げてきた基礎的タームは、実践を経由し、実践の視角から再解釈されなければならないという問題意識についてである。第2に、これらの基礎的タームを、言語を通じて語るという場合でも、これらは本来、言語と実践が一体となって説明されるものであり(「すること」、「述べること」の一体性)、その意味で言語論的転回や解釈学的転回のカテゴリーからすではみ出ししている。実践は言葉だけでは説明しきれない欠損部分を補うものであると同時に、言葉の成立根拠そのものを問いかける基礎概念である。このことは生活世界を説明する場合においてもあてはまる。更にシャツキは次のように述べている。

「思想家はかねてより、主要な一般的社会的ことがらを取り上げるにあたって、「構造」、「システム」、「意味」、「生活世界」、「イベント」、そして「行為」について語ってきた。今日、多くの理論家は、それらと比肩しうる榮譽を「実践」に与えている。様々な形で実践を参照することは、哲学、文化理論、歴史から社会学、人類学、そしてエイジェンシーに至るまで、様々な領域の現代の研究者を待ち受けることがらとなっている」(Schatzki, 2001)。

ここでシャツキが語っているのは、いくつかの基軸的概念を中心に構成されてきた社会理論、とくにカルチュラルターン以後の文化理論が行き詰まりを見せ始める中で、その状況を



打開する概念として、多くの思想家が実践に注目しなければならなくなっている思想状況である。社会的実践理論と生活世界との関係に触れる指摘をシャツキ『現代理論の実践論的転回』（2001年）から引用してみよう。

「社会理論が取り上げてきた基礎的タームは全て実践を経由し、実践の視角から再解釈されなければならない。言語を通じて語られてきた基礎的タームは、言語表現だけでなく、実践と一体となって説明される。実践は言葉の成立根拠そのものを問いかける基礎概念であるという意味で、言語論的転回や解釈学的転回のカテゴリーからすではみ出してしまっている」（Schatzki, 2001）。

この引用文からもわかるように、知識は、認識によってではなく、実践という背景に裏づけられて根拠を持つようになる。知識は主体である人間が客体を理解することによって獲得されるというようなものではない。すでに述べたように、表面的にはそうであるとしても、知識は何よりもまず、世界＝内＝存在である人間が、内存在である自己を表出するために日常的に行っている実践を通じて、そこに根拠づけられながら獲得される自己了解である。知識とはこのように、現存在の存在様態に対する理解に基づく二つの開示領域に関わるものである。すなわち、①世界にはどのような意味があるのか（世界の世界性＝有意味性）、すなわちハイデガーの言う環境世界が現存在や世人にとってどのような意味を持っているか、②行為にどのような意味があるのか、すなわちどのような行為が正当と見なされるのか（自己の開示）ということである。大事なことは、こうした存在了解の二つの領域のいずれにおいても、実践を通して分節化されていることである。

### （3）社会的実践理論の文化理論に占める位置

そこでまず、社会的実践理論の文化理論に占める位置について見てみることにしよう。

レクヴィッツは、個人主義的社会理論と規範的社会理論のはざままで、両者に対する批判を内在させながら文化理論が登場してきた経緯について簡潔に整理している。全ての社会理論は、「社会的なるもの（the social）」の出自、言い換えれば「人間行為と社会秩序の条件を把握する方法」をめぐって立論されている。社会生活が、人々がともに生きる構造によって営まれているというのであれば、その構造が、何に基礎づけられ、誰によって、どのように生み出されるのかについて説明することは、どの社会理論にも共通に課せられた課題となる。

実践理論は、文化理論にとどまりながら、文化理論をはみ出す可能性を秘めている。社会的なるものの根拠を文化に求めるという文化論的転回の枠組にとどまる限り、結局のところ、デカルトからカントに受け継がれ、フッサールによって頂点を見た意識哲学の流れを継承しただけでは、それを乗り越えることができなくなってしまう。これを克服するには、主観と客観、理論と実践との、意識哲学がこれまで追求してきた関係の反省が必要となる。実践にはこの可能性が秘められている。ハイデガーの現象学的解釈学やウイトゲンシュタインの言

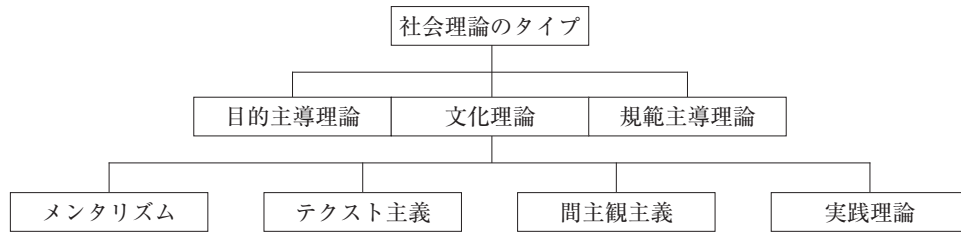
語ゲームに注目するのはそのためである。

第1図は、レクヴィッツの「社会的実践理論に向けて 文化理論の発展」(2002年)の論旨を図示することで、社会理論と文化理論との関係や文化理論における思潮の分化や社会的実践理論の位置を明らかにすることをねらいに描かれたものである(Reckwitz, 2002a)。レクヴィッツによれば、社会理論は、人間が社会的に存在することの意味、すなわち、社会的なるもの場や人間が共に生きることの成立基礎の理論的根拠を明らかにすることを課題としている。社会理論には三つの類型がある。目的主導理論(ホモ・エコノミカスマデル)は、諸個人の目的、意思、利害から社会秩序を説明している。分析の最小単位は諸個人の行為にある。規範主導理論(ホモ・ソシオロジカスマデル)は、デュルケム社会学、パーソンズ的な機能主義に見られるように、集团的規範や価値から社会秩序を説明しようとしている。分析単位は規範的な基礎構造にある。それに対して、文化理論(ホモ・シンボリカスマデル)は、目的主導理論と規範主導理論のはざまにあって、両者を批判することをねらいに、第2次大戦後に登場してきた理論である。分析の基礎単位は、人々による意味の理解、解釈、構築、そして象徴構造にある。レクヴィッツは、「文化理論の新しさは、主体が、一定の型式にしたがって世界を解釈したり、それにとまなうやり方で振る舞うことを可能にし、制約する知識の象徴的構造の再構築によって行為を説明、理解しようとしていることにある。社会秩序はその場合、相互の規範的期待の応諾物として現れるのではなく、集团的認識構造や象徴構造の中や、意味を世界に帰す社会的に共有した方法を可能にする「共有知識」に埋め込まれたものとなっている」と述べている(ibid.)。

社会的実践理論は文化理論の一翼を占めている。しかしその位置は両義的である。社会的実践理論は、一面で、第1図に示されているように、「文化理論の下位概念」として位置づけられている。すなわち、社会的実践理論は、「社会的なるもの「中心」は知識の象徴的、認識構造とつながっている」という文化理論を継承し、実践によって社会の共有知識が育まれ、社会の秩序が形成されると考えている。しかし、社会的実践理論は、他面において、「社会実践理論と他の文化理論との間に多くの違いがあるものの、最も重要かつ基本的違いは、実践理論が社会的なるものを他の文化理論とは異なる領域に位置づけていることにある。実践の場合、社会的なるもの「場所」は異なっている。同時に、このことは社会理論の「最小」単位と、実践理論における社会分析が異なった形で概念化されているということの意味している」というレクヴィッツの指摘にもあるように、社会的実践理論は、他の文化理論を批判することで、文化理論からはみ出そうとする契機も胚胎させている。現象学に縛られていた生活世界論を再検討するとともに、その可能性を羽ばたかせようとしている本稿の視座には、文化理論に占める社会的実践理論の両義的性格が反映されている。

文化理論は、論理実証主義や分析哲学に対する批判を問題意識に持つ文化論的転回を受けて、第2次大戦後に登場してきた社会理論のひとつである。文化論的転回は、言語論的転回、

第 1 図 現代社会理論の実践論的転回



(出所) Semke Cornelia Kuijer, *Implications of Social Practice Theory for Sustainable Design*, 2014, p. 25.

解釈学的転回、パフォーマンスターンの、ポストコロニアルターンなど、様々な転回を全て含めた総称であるが、ここで重要なのは、全ての転回を全体的に包んでいる、「メガ」転回的位置にあるのが言語論的転回と、その後現れてきた様々な転回を下支えしている解釈学的転回である。このように、言語論的転回と解釈学的転回は、その後の転回を規定する関係にある。ギアーツが言うように、文化論的転回の本質は「尋ねるべきことは意味にある」(ギアーツ, 1987) という文化そのものにある。文化理論の下位に位置する実践理論が、文化理論からはみ出す可能性を探るという場合でも、実践理論が他の文化理論とともに、言語論的転回や解釈学的転回の影響をどのように受けているのかを明らかにしておくことがまず必要になる。

社会的なるものの位置によって、文化理論は、メンタリズム、テキスト主義、間主観主義、そして実践理論に分かれる。文化メンタリズム社会分析の最小基礎単位は人間の精神構造にある。ここでの社会的なるものとは精神的なるものである。レクヴィッツが指摘しているように、「社会的なるものとは、フッサールが『デカルト的省察』の中で精査しているように、意味の共通世界における主観的アイデアを指している」。文化メンタリズムは、シュッツに代表される主観的バージョンと、フッサールに代表される客観的バージョンに分かれるが、シャツキの言葉を借りるならば、どちらにも共通しているのは、「精神が特定範囲の活動や属性を収容する実質、場、或いは領域であるという考え」にある。文化メンタリズムが精神の内側へと深く沈み込むのに対して、文化テキスト主義は、精神の外側、すなわち、象徴、言説、コミュニケーションなど、具体的な表象としてあらわになったテキストを素材に、それを解釈することで、文化の中に社会的なるものを見出そうとしている。とくに、文化テキスト主義が解釈学的転回にもたらした意義は大きい。解釈学的転回は、他の転回の前に聳え立つ特殊な転回である。何故なら、解釈学的転回はテキスト概念の確立と、「テキストとしての文化」のメタファーが他の転回を基礎づけているからである。解釈学的転回が今でも影響力を持ち続けているのはこのメタファーにある。文化間主観主義が社会的なるものを発見する場所は、ハバーマスの「コミュニケーション行為理論」に見られるように、言語の使用

による相互行為、すなわちコミュニケーションにある。人は間主観的な相互行為を通じて社会的なるものを生み出し、その武器をもって、システムに対抗しようとしている。

#### (4) 意識と存在、そして実践へ

第1表は、「生活世界論の構造比較」と題して、フッサール現象学とハイデガー哲学（現象学的解釈学）を比較したものである。ここであえてフッサール現象学との比較を、社会的実践理論ではなく、ハイデガー哲学との間で行おうとしているのは、社会的実践理論が生活世界の組み立ての本質的部分を『存在と時間』に代表される前期ハイデガーに依拠し、それを援用しようとしているからである。勿論、援用しているからといって、両者の異同に細心の注意が払われなければならない。とくに、「存在から実践へ」という構図を説明する際、意識から存在へ、そして更に存在から実践へというように、二つの段階を経た転換の論理を説明しようとする場合、理論と実践という古くて、新しい問題に関するハイデガー哲学と社会的実践理論との異同には格段の注意を必要とする。

この表からもわかるように、両者の本質的違いは、フッサール現象学が生活世界を認識論として構成しようとしているのに対して、ハイデガー哲学の場合、主体-客体という二元論から離れ、それぞれの実体の存在のあり方から構成しようとしていることにある。「ハイデガーのフッサール批判を一言で表わせば簡単である。それは、「存在の問いの欠如」である」（竹市、昭和55）と言われるように、フッサール現象学には、認識論はあっても、存在論はない。ハイデガーによれば、認識は、世界=内=存在のうちに基づいた、現存在の一樣態である。正確な言い方をすれば、存在論は認識論を吸収する。このようにハイデガーの基礎的存在論の核心は、世界=内=存在という現存在の存在構造にある。ハイデガーは、様々な存在者の中でも、人間だけが世界=内=存在における内=存在として存在することができる」と述べている。内=存在とは、コップの中の水というような物理的な位置を指しているのではない。内=存在とは、ドレイファスが的確にまとめたように、「～の中にあること」(being in) という空間的内属ではなく、「物事に従事することによって自分自身に立場をとる」(being-in) という意味を本質的に持っており、ハイフン付きであるかどうかの意味はこのように決定的に大きい。すなわち、内=存在とは、恋愛中、兵役中というように、ある事象のなかで当該者が占めている位置、言い換えれば、その中で適所的に参与した存在のあり方を指す概念である。そのため、まず世界=内=存在を、根本的構成としてあらかじめ解釈しておくことが必要となる（ドレイファス、2000）。

このことは生活世界論についてもあてはまる。主体と客体との一致は究極的に不可能であるというデカルトからカントへ受け継がれてきた認知論的立場から、現象学は、主体が客体に近づく唯一の道として、主体の意識のあり方それ自体に注目していた。生活世界についても、現象学は、自然的態度に終始する生活主体について、判断中止（エポケー）を行うこと



第 1 表 生活世界論の構造比較

<p>フッサール現象学</p> <p>認識論としての生活世界論            主体は客体に一致させることができない            ⇒主体の意識のあり方こそ、主体が客体に            近づく唯一の道            生活世界論はその延長            自然的態度に終始する生活主体は、判断中            止（エポケー）を行うことで現象学的残余            として辿り着く純粹意識（意識の志向性）            ⇒ 孤立した諸個人の意識による組み立            て（ノエマ-ノエシス関係）</p>	<p>ハイデガー哲学（解釈学的現象学）</p> <p>存在論としての生活世界論            世界=内=存在（適所的参与）            現存在の存在            意識 ⇒ 実践 或いは、存在論的差異            環境的世界における配慮と顧慮（共現存在）            存在了解（理解・了解と解釈との関係）            平均的日常性（世人）と頹落            本来性と非本来性            本来の自己（実存）</p>
---	---

で現象学的残余として辿り着いた純粹意識（意識の志向性）に沈潜し、純粹な理念的像として描こうとしていた。このように生活主体の意識や精神、主観性に沈潜していく現象学に対して、ハイデガー哲学の生活世界論が何よりも注目したのは、生活主体の実存的な存在様態である。人々はどのような空間で生きているのかという問いに、ハイデガー哲学は世界=内=存在であると答えた。「フッサールにおいては、その結果見出され探究されるべき主題は、「超越論的主観性」における「世界」の「構成」の「本質構造」であったのに対し、ハイデガーにおいては、それは、「現存在」の「実存」にもとづく「世界=内=存在」の「本質的な構造」とその「意味」であった。ここで両者を分け隔てているものは、「超越論的主観性」と「実存」という根本視角である」（渡邊，2010）。ハイデガーの基礎的存在論がフッサール現象学を土台にしているという場合でも、ハイデガーは、「現象学の〈主観〉に立ち戻る方法こそ、「そもそも存在するとはどういうことか」と問う存在論を可能にする、唯一の方法」ということを主張していたわけではない。ハイデガーの言う「現象学的な現象観念」には、現象学が問題とすべきものは、「意識」ではなく、「存在者の存在」であるという根本的な認識の変化がある。フッサールが求める現象学的還元が超越論的主観性に辿り着く方法論であったのに対して、ハイデガーの場合、その方法論は、存在や実存という本質的構造に辿り着くためのものであった。

世界に内属する生活主体は、そこに棲みつき、そこに馴染むことで適所的位置を与えられ、世界へ参与していく。現存在は、世界における自らの位置を了解し、生きるための目的指示連関を総合的に判断しながら、環境世界にある道具的存在者に配慮しつつ、他者（共現存在）に対しても可能な限り顧慮しながら、現実的で、具体的な生活を営んでいる。ハイデガー哲学からすれば、現象学が想定する生活世界は、認識論の世界でしかないだけに、ギリシャ哲学以来連続として続いてきた実在問題としての外的世界にしかすぎない。存在論として

の生活世界は外的世界に対する本質的批判から出発しなければならない。レヴィナスが言うように、「認識論は存在論のうちに、認識は存在に吸収される」(レヴィナス, 1988) ものでなければならないのである。

ここで注目しなければならないのは、現実的な生活主体の姿が、平均的日常性に終始する世人とその頹落にあることである。ハイデガー哲学は、フッサール現象学が意識や精神から導き出された自然状態を想定していた場所に、本来性と非本来性のはざまで、頹落することに葛藤しながら生きることを存在論的に了解している生活主体の平均的日常性を位置づけている。ハイデガー哲学の生活世界論の出発点は、このような生活主体の存在様態である。社会的実践理論が受け継ぐのは、ハイデガー哲学が想定するこうした生活主体の存在様態から必然的に生まれる実践の意義である。社会的実践理論は、前期ハイデガー哲学が課題とする存在の意味から実践哲学をどのように引き出そうとしているのだろうか。

これまで述べてきたことからわかるように、社会的実践理論は、ハイデガー哲学に見られる実践への関心を引き継ぎ、実践理論として再構成しようとしてきた文化理論の新しい動きである。ここで注意しておきたいのは、1960年代から70年代にかけて盛り上がりを見せた「実践哲学の復権」と、1990年代以降本格的に論じられるようになった社会的実践理論(とくに第2世代)との異同についてである。どちらも実践に対する関心という点では一致している。しかし両者の間には、実践に対する関心を引き出す文脈や対象、目的という点で大きな違いがある。「実践哲学の復権」が課題としたのは、近代科学の勃興や科学を制作(ポイエーシス)の領域に取り入れることで飛躍的進展を見た産業主義の結果あらわれてきた、哲学からの実践の消失という状況に対する強い憂慮から、古代ギリシャ哲学以来近代哲学が自明としてきた「理論の実践に対する優位」という命題を逆転させる必要性から生まれた政治哲学や政治倫理学からの反撃であった。近代の発展と産業主義の勃興とともに受容されてきた実証主義は、制作(ポイエーシス)とテオーリア(観照)を第1哲学とする理論領域との結びつきを強める一方、本来両者を結びつけていたはずの実践(プラクシス)領域の意義が次第に消えていく状況を生み出していた。フランクフルト学派の批判理論、ポPPERに代表される批判的合理主義の登場、ハバーマスのコミュニケーション的行為理論などは、いずれも理論に対する実践の位置を再検討するという意味を内在した政治哲学からの新しい動きであった(有福孝岳, 1981)。この動きに対して、ブッフとシャツキは、「実践の諸問題は理論と実践の繋がりだけに限定されていたわけではない。そこには、もう一つの問題群として、実践とは人間生活が生み出す全てを包括する領域や文脈であるという理論的確信がある」と述べ、20世紀に登場してきた新しい焦点のひとつに、「人間生活における実践領域」、すなわち「人間生活が生み出される領域としての実践」に対する関心があることを指摘している(Buch and Schatzki, 2019)。本稿が取り上げる生活世界とは、「実践哲学の復権」とは異なる、新しい視座から生まれる日常生活への関心と、それに基づく領域を指している。実

践が人間活動と密接に関係している以上、この確信は、人間の存在が精神や意識にではなく、活動それ自体にあるという直観に基づいている。彼らの言葉を借りるならば、世界と関わること、世界における現象や事象に対応するために人間的に没入することから生まれるのが生活という空間である。こうした特徴を持つ生活世界を描くには、フッサール現象学のような認識論から離れ、生活主体の存在論から出発する必要がある。彼らの指摘にあるように、「ハイデガーの世界=内=存在は、この現象に対する関心を表現したものである。ハイデガー、デューイ、ウイトゲンシュタインなどの哲学者は実践領域に焦点を当て、実践の優位を支持することで、目的論、知識の表象、内容、或いは認知形態による統治を否定した。これらの思想家にしたがうならば、世界の歩みへの関与は、能力、習慣、実践的了解や実践知に基づいていなければならない。これらの思想家は、活動の文脈的、過程的、身体化された時間の側面に焦点を当てている」(Buch and Schatzki, *ibid.*)。

ハイデガーが『存在と時間』で求めていたのは、現存在の「日常性の解釈学」である。しかし彼は、日常性をそのままの姿で映しだそうとするのではなく、人間の存在のあり方という実存論的分析から明らかにしようとする。ここで言う日常性とは、起床する、歯を磨く、掃除する、読書するという、ごく当たり前のように私たちが習慣的に繰り返し行っている実践が束になってストーリーが作られるライフスタイルのことである。

#### 参 考 欧 文 文 献

- Bernstein, Richard (1971), *Praxis and Action*, Penn Press.
- Bonnell, V.E. and Hunt, Lynn (ed.) (1999), *Beyond the Cultural Turn*, University of California Press.
- Buch, Anders and Elkjear Bente (2015), *Pragmatism and Practice Theory: Convergence or Collisions*, paper presented at OLKC.
- Buch, Anders and Schatzki, T.R. (2019), Introduction: Question of Practice: Related Perspectives From Pragmatism and Practice Theory, Buch, Anders and Schatzki, T.R. (ed.), *Questions of Practice in Philosophy and Social Policy*, Routledge.
- Dewey, John (1980), The Need for a Recovery of Philosophy, Boydston, Ann (ed.), *The Middle Works, 1899-1924*, Southern Illinois University Press.
- Dreyfus, Hubert (1991), *Being-in-the-World*, The MIT Press.
- Doris Bachmann-Medick (2016), *Cultural Turn*, De Gruyter.
- Heidegger, Martin (1975), *The Basic Problems of Phenomenology*, translated by Albert Ofstadter, Indiana UP.
- Do. (2010), *Being and Time*, translated by Joan Stambaugh, State University of New York Press.
- Jonas, M., Littig, Beate and Wroblewski (ed.) (2017), *Methodological Reflections on Practice Oriented Theories*, Springer.
- Miettinen, Reijo (2010), *Re-Turn to Practice: An Introductory Essay*.
- Okrent, Mark (1988), *Heidegger's Pragmatism*, Cornell UP.

- Reckwitz, Andreas (2002a), Toward a Theory of Social Practices A Development in Culturalist Theorizing, *European Journal of Social Theory*, 5 (2).
- Do (2002b), The Status of the “Material” in Theories of Culture: From “Social Structure” to “Artefacts”, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 32-2.
- Rorty, Richard (ed.) (1992), *The Linguistic Turn*, The University of Chicago Press.
- Sandberg and DallAlba (2009), Returning to Practice Anew: A Life-World Perspective, *Organization Studies*, 30-12.
- Schatzki, Theodore R. (1993), Wittgenstein + Heidegger on the Stream of Life, *Inquiry: An Interdisciplinary Journal of Philosophy*, 36-3.
- Do. (1996) *Social Practices A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, Cambridge UP.
- Do. (1997), Practices and Actions A Wittgensteinian Critique of Bourdieu and Giddens, *Philosophy of the Social Sciences*, 27-3.
- Do. (2002), *The Site of the Social*, Pennsylvania State University Press.
- Do (2007), Early Heidegger on Sociality, H.L.Dreyfus and M.A.Wrathall (ed.), *A Companion to Heidegger*, Blackwell.
- Do (2010), *The Timespace of Human Activity*, Lexington Books.
- Do (1987), Overdue Analysis of Bourdieu’s Theory of Practice, *Inquiry*, 30-1.2,
- Do (2010), Materiality and Social Life, *Nature and Culture*, 5 (2).
- Do (2017), *Martin Heidegger: Theorist of Space*, Franz Steiner Verlag.
- Schatzki, T. et. al. (ed.) (2001), *The Practice Turn in Contemporary Theory*, Routledge.
- Wrathall, M.A., Heidegger on Human Understanding.
- Wrathall, M.A. (ed.) (2013), *Heidegger’s Being and Time*, Cambridge UP..

#### 参 考 邦 語 文 献

- 荒畑靖宏 (2009) 『世界内存在の解釈学』 春風社
- 有福孝岳 (1981) 「実践哲学の復権」『思想』 680号
- 池田喬 (2011) 『ハイデガー 存在と行為』, 創文社
- 同 (2015) 「生活世界の発見—初期ハイデガーと現象学」 細川亮一・斎藤元紀・池田喬編著『始まりのハイデガー』 所収, 晃洋書房
- 石田三千雄 (2015) 「フッサール生活世界の現象学—生活世界の存在論の課題と射程をめぐって」 徳島大学総合科学部『人間社会文化研究』 23巻
- 魚谷雅広 (2002) 「ハイデガーの「実践」と「行為」をめぐって」『倫理学』 19
- 江原由美子 (1985) 『生活世界の社会学』 勁草書房
- 門脇俊介 (1992) 「ハイデガーと志向性—現象学的行為論のための一章」『情況』
- 同 (2000) 「生活世界, 志向性, 人間科学」 新田義弘編『フッサールを学ぶ人のために』 所収, 世界思想社
- 同 (2002) 『理由の空間の現象学 表象的志向性批判』 創文社
- 同 (2007) 『現代哲学の戦略』 岩波書店



- 同 (2008) 『『存在と時間』の哲学』産業図書
- 同 (2010) 『破壊と構築 [ハイデガー哲学の二つの位相]』東京大学出版会
- 門脇俊介・信原幸弘編 (2002) 『ハイデガーと認知科学』産業図書
- 金田耕一 (1991) 「生活世界への投錨—メルローポンティ「現象学」の方法と構想」『社会科学討  
究』36-3
- グレーシュ, ジャン (2007) 『『存在と時間』講義』(杉村靖彦訳), 法政大学出版会
- ギアーツ, C (1987) 『文化の解釈学 I, II』(吉田禎吾他訳), 岩波現代新書
- コイファー, ステフェン他 (2018) 『現象学入門』勁草書房
- ゲートマン, カール, フリードリッヒ 『『存在と時間』におけるハイデガーの行為概念』『ハイデガ  
ーと実践哲学』所収, 法政大学出版会
- 現象学・解釈学研究会編 (1993) 『プラクシスの現象学』世界書院
- 佐伯守 (1986) 『生活世界の現象学』世界書院
- 佐藤成基 (2010) 「文化社会学の課題—社会の文化理論に向けて」『社会志林』56 (4)
- ジェイムソン, フレドリック (2006) 『カルチュラル・ターン』(合庭惇他訳), 作品社
- シュッツ, A (2006) 『社会的世界の意味構成』(佐藤嘉一訳), 木鐸社
- 竹市明弘 (昭和 55) 「現象学とハイデッガー」『講座 現象学』弘文堂
- 竹田青嗣 (1989) 『現象学入門』NHK 出版
- 同 (2017) 『欲望論 第 I 巻「意味」の原理論』講談社
- ドレイファス, ヒューバート・L (2000) 『世界内存在 『存在と時間』における日常性の解釈学』  
(門脇俊介監訳), 産業図書
- ハイデガー (1994) 『存在と時間』(細谷貞雄訳), ちくま学芸文庫
- 同 (2010) 『現象学の根本問題』(木田元監訳) 作品社
- 新田義弘 (1992) 『現象学とは何か』講談社学術文庫
- 同編 (2000) 『フッサールを学ぶ人のために』世界思想社
- 福士正博 (2020) 『持続可能な消費と社会的実践理論』柘風舎
- フッサール, エドムント (昭和 49 年) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木  
田元訳) 中央公論社
- 同 (1999) 『経験と判断』(L. ランドグレーベ編, 長谷川宏訳), 河出書房新社
- 宮原勇編 (2012) 『ハイデガー『存在と時間』を学ぶ人のために』世界思想社
- レヴィナス, エマニュエル (1988) 『フッサールとハイデガー』(丸山静訳), せりか書房
- 吉見俊哉 (2003) 『カルチュラル・ターン 文化の政治学へ』人文書院
- 渡邊二郎 (2010) 「『危機』と『イデー I』とを結ぶもの」『渡邊二郎著作集第 5 巻フッサールと  
現象学』所収, 筑摩書房
- 渡邊二郎編 (2011) 『ハイデガー「存在と時間」入門』講談社学術文庫

(本稿は、2019 年度東京経済大学国内研究員制度の研究成果の一部である)